

高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書

1987
高遠町教育委員会

高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書

1987
高遠町教育委員会

序

高遠城は戦国時代の平出城であった。南北朝の時代より高遠氏7代2百年の居城であったものを、天文14年武田信玄によって改修を企てられ、山本勘助の繩張りにより信玄の前進基地として築かれた城であると言われている。天正16年、信玄なきあと勝頼の時代城主盛信は奮戦むなし玉砕し落城した。武田家滅亡後、保科・鳥居・内藤3代にわたっての居城であって伊那地方の文化・政治の中心地であった。明治5年廃藩となり、城は解体され、城内の建造物、樹木、城地の一部は払い下げられ、明治8年には公園となった。昭和48年5月26日、廃藩後今日にいたるも中世の城廊としてその遺構は当時の繩張りを止める処が多いとして国の史跡指定を受け現在にいたっている。

昭和61年度より3年計画で文化庁県文化課の指導のもとに、高遠城跡保存管理計画を樹立するため、千葉大学、信州大学、県文化財保護審議会長、地元文化財保護委員の先生方により「高遠城跡保存管理計画策定委員会」を設置して、史跡の保存、復原整備の基本計画をたてその実施計画を図ることになった。計画最終年度に復原計画の一つである二ノ丸門復元の計画に対する史実の裏付に万全を期するため、二ノ丸門跡地の発掘調査をすることになり、昭和62年9月17日発掘調査に取りかかり10月28日に復原作業までが終了した。

調査は先づ近世に作図された城の平面図を参考に内柱位置を推定、城の旧地面まで発掘し、調査を行ない、二ノ丸門を取壊した当地の地面迄発掘を行ったところ、直接門跡の礎石は発見することが出来なかつたが、礎石底部に入れる割石などが認められ、内址に何らかの形で関わる遺構ではないかと、論議された。今回の発掘調査と高遠城に今迄残っている多くの資料から検討して、整備計画にある二ノ丸門の復原を期待するところであります。

この発掘調査にあたり調査団長友野良一先生、木下平八郎先生はじめ教育委員会事務局関係者の御努力により調査を終え、この報告書が刊行出来ますことを心から感謝申し上げます。

昭和63年3月

高遠町教育長 向山幹男

例　　言

1. 本書は昭和62年に実施した、高遠城跡二ノ丸門跡を確認するために行なった現場変更の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は高遠城跡保存管理計画策定専門委員会の計画を受け、高遠町教育委員会が実施した。
3. 本報告書は発掘の成果を実測図と写真を主にして編集した。
4. 本報告書の執筆者及び図面の作製者は次のとおりである。
 - 本文執筆者　友野良一・三沢英彦・小松博康
 - 遺構図　木下平八郎・友野良一・小松博康・北山芳美・北原幸司
 - 遺物の実測　友野良一
 - 遺物の復原　友野良一
 - 写　　真　　木下平八郎・友野良一
5. 本報告書の編集は高遠町教育委員会が行った。
6. 出土遺物は高遠町教育委員会に保管している。

目 次

序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査の経緯	1
第1節	発掘調査に至るまでの経過	1
第2節	調査の組織	1
第3節	発掘調査の経過	2
第Ⅱ章	遺跡の環境	5
第1節	遺跡の位置	5
第2節	地形及び地質	6
第3節	歴史的環境	9
第Ⅲ章	遺構と遺物	10
第1節	遺構と遺物	10
図 版		19
あとがき		34

目 次

挿図目次

挿図 1 位置図 A	5
〃 2 地形図 A	6
〃 3 地形図 B	7
〃 4 地質図	8
〃 5 鉄器実測図	12
〃 6 高遠城の図	13
〃 7 高遠城縄張図	14
〃 8 高遠城之図	15
〃 9 上：二ノ丸御門（宝暦頃） 下：鳥居家高遠旧図	16
〃 10 高遠城跡二ノ丸門実測図	17

図版目次

図版 1 上：二の丸門入口付近 下：調査前の二の丸門跡	21
〃 2 上：埋土を除去したところ 下：敷石遺構や筋状敷石出土状況	22
〃 3 上：最初割栗石出土の遺構 下：礎石跡と思われる割栗石出土状況	23
〃 4 上：筋状敷石遺構 下：筋状敷石遺構	24
〃 5 上：敷石遺構 下：敷石遺構の断面調査状況	25
〃 6 上：礎石の跡と思われる個所の割栗石や遺物出土状況 下：筋状敷石遺構下部の断面調査状態	26
〃 7 筋状遺構とトレント	27
〃 8 列石出土状況	28
〃 9 遺物出土状況	29
〃 10 東側拡張トレント	30
〃 11 発掘調査状況	31
〃 12 出土遺物	32
〃 13 出土遺物	33

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

高遠城跡二ノ丸門跡発掘調査は、高遠城跡保存管理計画策定専門委員会より町教育委員会に対し、現在解体保管されている旧二ノ丸門と目されている御門を発掘、資料調査を行ない確認のうえ建設するようにとの報告があり、これを受けて二ノ丸門復原建設のため町教育委員会が友野良一、木下平八郎両氏の協力を得、今回の発掘調査を行なった。

第2節 調査の組織

○高遠町教育委員

教育委員長 中原 英太郎

委員長代理 岡部 善治郎

委 員 矢沢 清

〃 北原 作英

教 育 長 向山 幹男

教 育 次 長 北山 芳美

係 長 矢沢 秀雄

係 小松 博康

〃 三沢 英彦

〃 北原 幸司

○発掘担当者 友野 良一 日本考古学协会会员

調査員 木下 平八郎 東洋陶磁学会員

第3節 発掘調査の経過

月 日	日 誌
9月17日	<p>調査器材の運搬、調査箇所の設定、県文化課より笹沢指導主事来町、発掘に関しての打合せ。午後より発掘を開始する。表土の除土はバックで行う。東側に集石と水道管、西側に電信ケーブルの位置を確認する。</p> <p>本日の参加者、笹沢主事・向山教育長・北山次長・矢沢係長・北原幸司・小松博康・三沢英彦・木下平八郎・友野良一・作業員6名。</p>
18日	<p>発掘調査は入口である北側より南に向って調査を進めることとした。本日は前日に引続いて水道管の伏設してある西側と、電信ケーブルの埋設してある付近を南に向って発掘を進めた。水道管伏設箇所と電信ケーブルとの埋設箇所との間に二条の敷石遺構が発見された。この敷石遺構内にこの地方では建築の基礎などによく使われる割栗石が、ある程度集中して発見されたことによって、それを中心に「二ノ丸門」の間口10尺、奥行12尺の寸法を当はめて見ると、偶然の一致か柱の位置に相当する個所より、割栗石が集中して検出された。発掘に参加している方々と協議したところ、門の位置の推定の場所とも合致しているところより、これ以上掘り下げると破壊につながるおそれがあると判断し、調査を中断してみることとした。本日の参加者、向山教育長・北山次長・北原幸司・友野・木下。発掘協力者東部建設。見学者高遠町文化財保護委員長黒河内太郎氏。</p>
19日	<p>本日は測量を主にして作業を進めながら、今迄不十分であった箇所を調査する。この調査は委員会に計られる関係もあって、説明資料の作成を急ぐ。建設課より2名の応援あり。</p>
10月6日	<p>前回の調査では不十分であるとの判断から、本日より第二次の調査を実施することになった。前回の調査箇所の面は十分調査が行われたので、今回は遺構の存在する最終段階迄掘り下げて確認することになった。調査は前回の調査された面より10~20cm程掘り下げるとテフラ層に達することが試掘で知ることができた。本日の出土遺物は内耳鍋の破片・瓦・器種不明の鉄片・釘・近世陶磁器片。本日の参加者、三沢・小松・木下・友野・作業員。</p>
7日	<p>調査用メッシュの設定。メッシュの記号は西側からA~Hまで。ゲートを中心北側に0~12とグリッドを設定し調査を進める。Aの9~10を両側に拡張して</p>

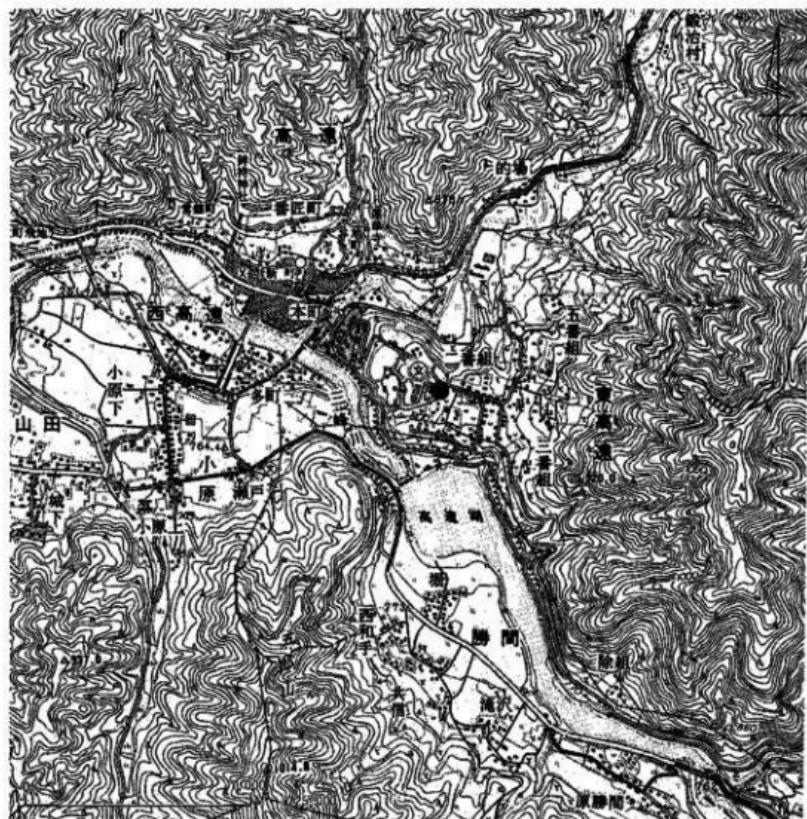
月 日	日 誌
7 日	調査を行なう。また、E～Hの8～12グリッドも調査。この区域は集石群のある個所であるので、集石群の分布する範囲を確認。調査中水道管の破損でグリッド内が水びたしに、急いで排水を行う。西側の拡張個所から鉄片が出土する。参加者は前日のメンバー。
8 日	本日は敷石部分の調査。北側入口の個所も拡張する。また、東側集石群も引き続いて調査。この区域に古い鉄管が埋設されているのを発見。現在使用されていないようである。Dグリッドの7に瓦片が多く検出される。その中に軒先瓦の巴文が混じっていた。筋状敷石面に角釘や陶片が出土。
9 日	東側集石群の拡張個所H-10グリッドの東側にローム面がやや高くなっている個所が発見される。このことは、「二ノ丸」門の位置を決定する上に一つの目安となるからである。しかし、まだ東にも集石は続くようである。今日から出土遺物の番号を付し取り上の準備を進める。また、今迄に出土した石の面を水洗。本日の出土遺物は徳久利・小皿・土管・瓦等が検出される。
12 日	休みが続いたので遺構の上に覆ったシートに溜った水をバケツでくみとる。調査用メッシュの水糸を修正する。高遠城跡の碑がある西側の敷石付近を調査。出土遺物の写真撮影。参加者5名。
13 日	調査の南限をゲート迄とし、この間を拡張して調査する。一方今日よりグリッド内の実測をはじめる。実測の担当を小松・三沢両氏が主任として当る。出土遺物の記録も併行して進める。作業は三沢・小松・宮下・木下・友野。
14 日	ゲートの西に調査区域を拡張、35グリッドを調査。この調査区域の表土35cmを除去すると、その下はローム層である。このローム面には遺構らしき施設は認められなかったが、ゲートに近いグリッドからは鉄片が検出された。また、この調査個所にも水道管が伏設されていた。今日はゲートの南側にも調査区域を拡張する。桂泉院の高遠城の絵図を調査。本日の見学者伊那北高校の堀口貞幸氏・丸田南枝さん。参加者 向山教育長・北原・木下・宮下・友野。
15 日	ゲート南の調査、調査区域内に南北に一列に並んだ列石が発見された。この列石は周辺の調査を行なわなければ、その性格を明かにすることはできないが今迄の調査の段階では、列石の東側がやや硬い面であることと、石の面の東面

月 日	日 誌
	がそろっていることから、道路の列石か建造物周辺の列石か不明の遺構が検出された。本日の参加者、向山教育長・北原・三沢・小松・木下・宮下・友野。
17日	ゲート南の遺構の清掃と実測、今日は建設課から伊藤文人・池上勇両氏の特別参加があり、実測を主に担当。本日の参加者、向山教育長・北山次長・矢沢係長・三沢・小松・友野。
21日	<p>予定していた調査が一応終りに近づいたので、県文化課笠沢主事を招いて今回の調査結果の協議を行った。今回の調査で問題となった点は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 第1次の調査で問題とされた花崗岩の割栗石の集石は、現在までの調査では「二ノ丸」門の基礎に直接関りを持つと断定するには問題があると考えられる。 2. 調査地区内に多数発見された礎・割栗石は、「二ノ丸」の建設に何らかの関わりがあると思われる。 3. ゲート南の調査区域に発見された列石は、どういう施設であるかは周辺の調査をまたなくては、明らかにすることは出来ない。 4. ゲートの南側に積まれている石垣を調査したところ、この石積より東側は埋立てられた個所であることがわかった。この埋立の時期など今後の調査で明かにしたいものである。 5. この公園に植えられている桜の最初は昭和初年と言われているが、ゲート付近から昭和7年に写した写真によると、本丸に向って左側に石積が見えている。この石積の西側には一段高い畠があるが、桜は戦時中切られて畠となつようである。こうして江戸時代から幾度か地形の変遷があったことを知ることが出来る。 6. 現在迄の調査の中で「二ノ丸」門の跡は、今「高遠城跡」の碑のある場所の東側あたりが一番有力な個所と考えられる場所である。
23日	最後にゲートの北側を東に5mのトレンチを入れたところ、トレンチの終点より東側に埋立はまだ続いていることを確認した。
24日	調査区域内の全測。今回調査された全域に河原砂を10~15cm入れ埋戻しをして、遺構の保存計った。本日が調査の最終日であるので、小雨の降る中であったが、向山教育長が先頭に立って頑張り夕方までに埋戻しを完了することができた。本日の参加者、向山教育長・北山次長・矢沢係長・小松・三沢・伊藤・東部建設の宮下社長。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

高遠城跡の地理的位置は、東経138度3分55秒、北緯35度49分に位置している。長野県上伊那郡高遠町東高遠2286・2295番地に所在する高遠城に至るには、国鉄飯田線伊那市駅より東方9kmの地点にあたる。また、中央東線茅野駅から杖突街道にて高遠に至ることもできる。高遠城跡付近は赤石山脈仙丈岳に源を発する三峠川と伊那山脈杖突峰に源を発する藤沢川の合流地点の三角台地に位置する。標高805.1m内外の範囲にある。



挿図1 位置図 A

第2節 地形及び地質

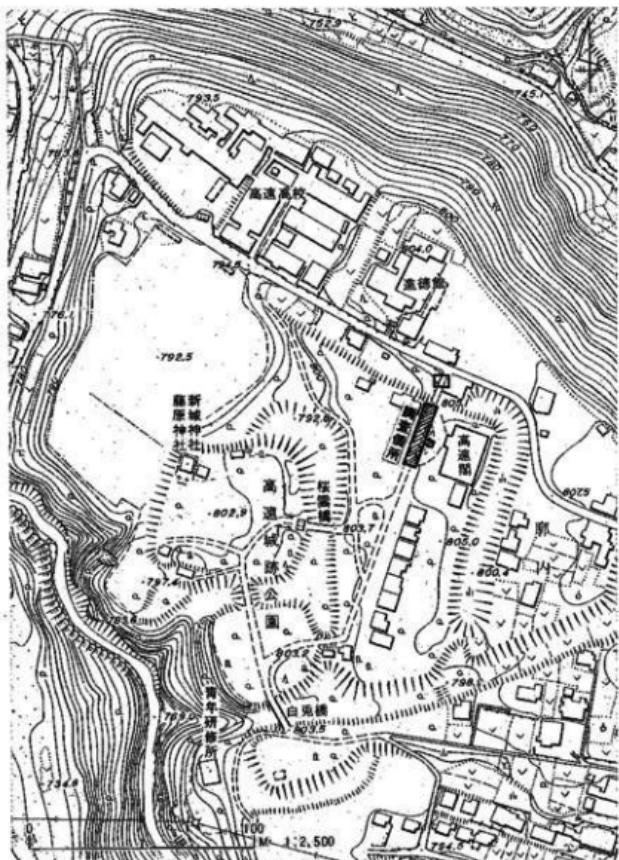
1) 地形

高速发展町は中央構造線に沿う細長い縱谷で、南部を北流する三峯川に、藤沢川、山室川など支流が合流して、河南地区白山と鉢持棧道の部分で伊那山脈に横谷をうかがっている。また、西日本の内帯と外帯の接触するところであって、庄鋸帶も細長く続き、伊那山脈の地塊が赤石山脈に向かって衝きあげ、断層したと見られ、谷の西側、つまり、伊那山脈の側は赤石山脈の側にくらべると急傾斜となっている。

高速发展城跡の堆積層は、三峯川河床から80mほど高いところにあり長谷村中尾の段丘に連絡している。また、西高速は河床から40~50mの高さに位置している。



挿図2 地形図 A



擇図3 地形図 B

2) 地質

高速发展町の地質は、高速发展跡の東にそびえる月藏山の北東を中央構造線が走り、藤沢の谷と通っていることから、三波川層、御荷鉾層、領家帯など複雑な構造をもっており、岩相の変化も激しい。河南地区は領家帯に属し、花崗岩系統のものが大部分を占め、三義地区は三波川層で、結唱片岩、蛇紋岩等が分布している。高速发展跡はこれらの地質帯のうちにある。

高速发展ダムの公園側に露出している大きな岩が、黒雲母花崗岩である。この黒雲母花崗岩が広くこの辺一帯の底盤となり、高速发展もこの上に構築されたのである。この岩盤の上部に伊那疊層と言われている層が堆積し、更にその上にテフラが堆積した地層である。

凡 例

	非特石英閃綠岩
	高速发展花崗岩
	種間石英閃綠岩
	矽状片麻岩帶
	麻風ミロナイト
	三波川結晶片岩類

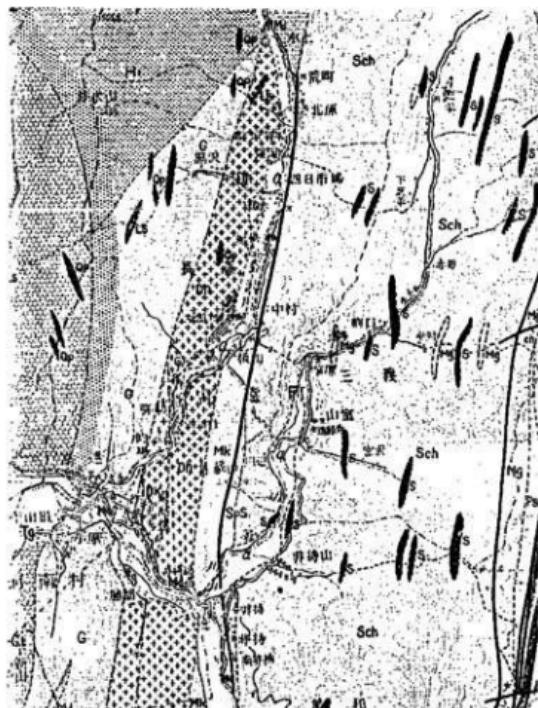


図4 地質図

(上伊那郡誌自然編)

第3節 歴史的環境

1) 戦国時代の平山城として名高い高遠城の歴史は、もう既に南北朝時代の頃より、高遠氏七代二百年の居城であったと言われてきた城郭で、天文14年武田信玄によって改築されたといわれている。武田信玄が西上するに当って前戦基地としての役割を果すにふさわしい戦国の時代の城郭である。爾来保科・鳥居・内藤と三代にわたっての居城として、この地方の文化・政治の中心地となり、大きな影響を与えてきた。

明治5年廃藩となり、城は解体され城内の建物、樹木は一部払下られ、明治8年には公園となった。しかし、城郭の形態の大半は往時の姿を止めることができ今日に至っている。

昭和48年5月「高遠城跡」として国の史跡に指定され、保存を計ることになったのである。

2) 城郭の変遷

- A. 現在高遠城の往時を知る資料として「主団合結記」が残り、絵図の中では最古のものと言われている。この絵図によると、二ノ丸、南曲輪、法幢院曲輪、三ノ丸はあまり変わっていないが、二ノ丸の門そのものはその後、建替えられているようである。
- B. 「千曲の真砂」の図は「主団合結記」と同じである。大手は西のように思われる。城郭は記されていない。
- C. この絵図は高遠城攻防の図で各郭の位置は明かであるが、土壘、堀、門は見られない。
- D. 保科時代の絵図で、土壘、堀、門などは明示されていない。城郭が画かれている。
- E. 鳥居氏時代末頃のものと思われる絵図で、二ノ丸門は東寄りに書かれている。各郭に門が画かれている。また、この時に勘助郭が出てくる。
- F. 鳥居氏時代の絵図とされている図で、「二ノ丸へい下ヨリほり口十三間」と寸法が記された絵図である。また、他の郭にも寸法が記されている絵図である。二ノ丸門の位置に御門とある。
- G. 享保10年に大地震があり城内各所が破損し、その修復の要請をした時に幕府に提出した図。この図には冠木門と樹形が明らかに書かれている。
- H. この絵図は享保～元文～延享年間に書れた図で、二ノ丸門は樹形に書かれている。
- I. 廃藩直前の慶応～明治初年の絵図。二ノ丸門には、冠木門が画かれ樹形で櫓門となっている。その位置は現在調査された場所よりやや東に近い所と推測される。以上「二ノ丸」門を中心として今迄の資料を整理してみた。

第III章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物

1) ① 敷石遺構はF～Hの6～11グリッドの位置に発見された。敷石は径15～40cmの自然石と、10～25cm大の黒雲母花崗岩（割石の破片）が200個自然石に混じっている敷石遺構である。この敷石面は南側がやや低くなっているが、北側は敷石が二重になっているところから北側より高くなつたと思われる。またFの10～11グリッドに南北3mにわたって、自然の平面を西に面して石積の根石かと考えられる列石が検出されたが、これが何の施設であるかは今のところ不明である。この遺構内から出土した遺物は、江戸時代末頃高遠城の用水として伏設された土管の破片、江戸時代末期～明治初年頃の陶磁の破片などが検出された。また、この敷石遺構の範囲はまだ東側に伸びていることが確認されたが、今回は発掘することができなかった。

2) ② 筋状敷石、この遺構は(A)敷石遺構の西側Cグリッド、2より9グリッドまで延長22m間にわたって発見された遺構である。この敷石は5～15cm程度の自然石と黒雲母花崗岩の割石（栗利石）が、30～80cm幅に敷かれた遺構である。この遺構と同じ遺構が3m東Fグリッドにも発見された。この筋状の遺構は昭和40年頃伏設された水道工事のため所々破損されていて、Cグリッド程は整然としてはいなかったが、3m幅で併行している筋状の遺構であることは間違いないものである。

これら筋状遺構内から発見された遺物は、江戸時代の土管・釘・鉄片や明治初年の頃の陶磁器等の遺物が発見された。これら遺物の発見の状況からして、昭和初年頃までは、これらの遺構の面は利用されていた可能性がある。

3) ③ 列石遺構、この遺構はCの-4グリッドからCの-22グリッドの間に検出された遺構である。この遺構は細長い自然石を用い、面の面を東に向直列に並べた形である。このような形状から、道路の縁石か、または建物の縁石であるかは、いま少し周辺を調査を行って見ないと結論は出せない状況である。

出土遺物は、瓦の破片、陶磁、鉄片等で江戸時代～明治初年頃の遺物である。以上の諸点から考えて江戸時代末から明治初年頃作られた遺構と考えられる。

4) ④ 集石、Dの3グリッドに検出された集石は、その径約90cm自然の礫の集石である。この集石は今迄発見された集石の内では建物址の礫石として一番ふさわしい遺構として見て見たが、これに対象となる東側は筋状敷石が通っている個所付近になっていて、丁度水道管

伏設工事のため荒されている個所であるので、集石として確認できなかった。しかし、この東側は高遠城跡の碑が建られているので、今回はついにここまで調査は打切られた。

5) ⑩ 埋立地について、二ノ丸門の取除きは明治初年のことである。門の取除かれた後すぐ埋立られたのではないようである。このことは、大正時代門のあった付近から本丸の方を写した写真を見ると東側は石積があり、西側は一段高く畠地であることから、この頃以後に現地表面迄埋立てたということがわかる。

6) 冠木門の前にあった石積は何時取去られたかは定かではないが、現在堀を埋立てている基礎の石積は、江戸時代の石と現代の石とが混って積まれている石積であるところより、冠木門附近の石を利用した石積ではなかろうか。

7) 二ノ丸門があった東側は武具の倉があったようであるが、もともと一段高かったものかどうか明かではないが、現在高遠閣の建られている所は相当広い範囲に高くなっているところより、土星の切取土砂だけで埋立てられたものかどうか疑問の一つである。

出土遺物

陶器（図版 12）

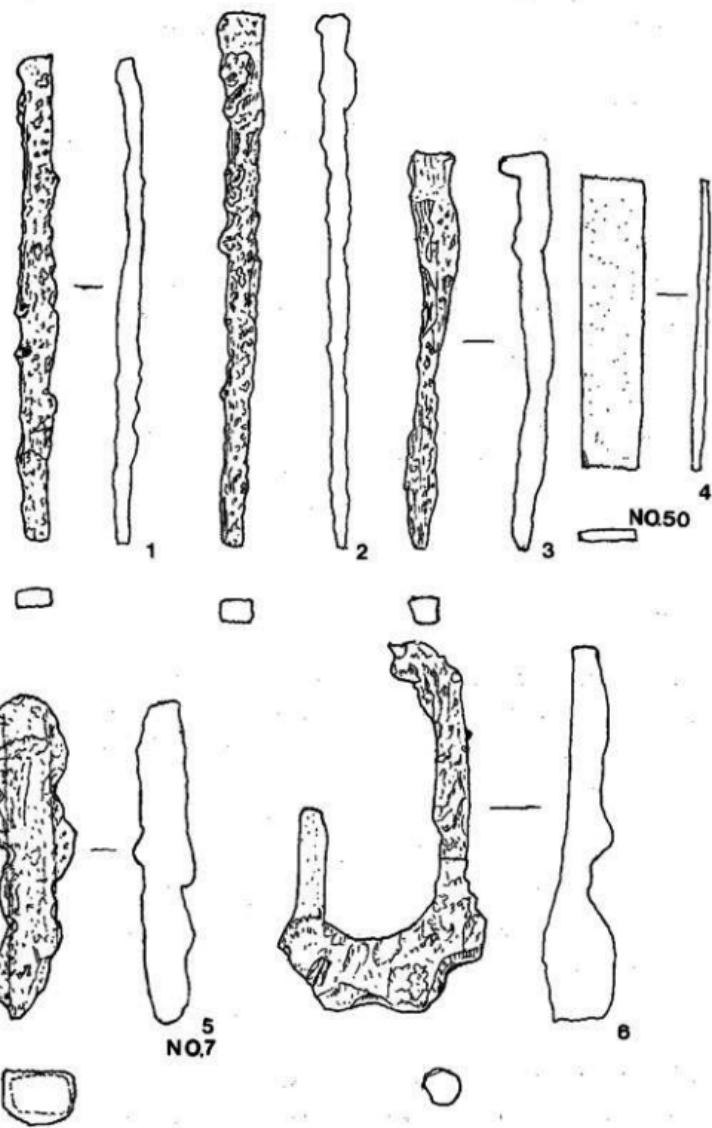
1. 常滑産の甕、印花の施された中世初め頃の陶器片。
2. 内耳鍋の底部の破片、中世末。
3. 志野釉の施された皿の破片產地不明。重焼のピンの跡が見られる桃山時代の陶器片。
4. 地物産。灰釉のかかった江戸時代末の片口破片。
5. 手描の染付の皿19世紀中頃の磁器。

図版（13）

6. 伊万里産か、巻物絵のある染付碗の破片、19世紀中頃。
 7. 御深井釉碗の破片、19世紀中頃。
 8. 美濃産の手描の染付茶碗、19世紀中頃。
 9. 美濃、展砂釉の施された19世紀の蓋。
- その他 明治・大正の陶磁器が数多く出土した。また明治頃の瓦の破片、高遠城に引水した布目の土管も発見されている。

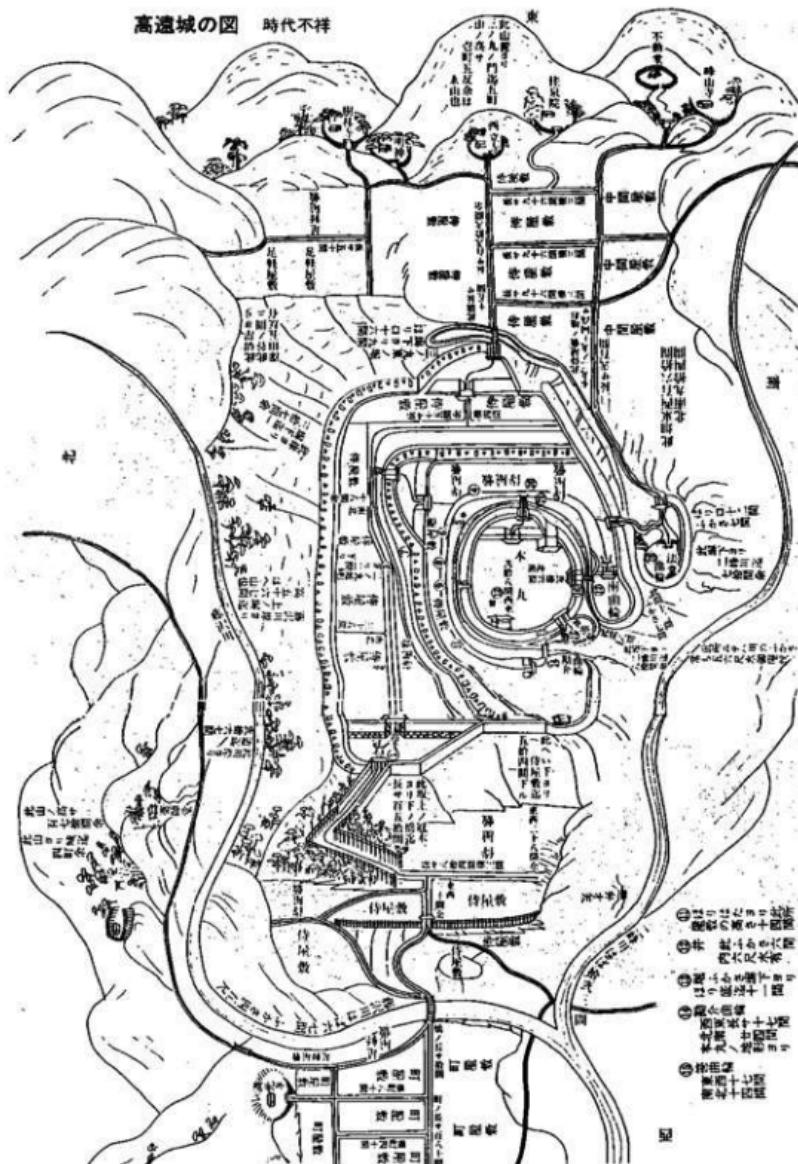
図（6）

1. 列石造構より出土した鉄錆の柄の部分。
 2. 列石造構出土の鉄錆柄の部分。
 3. 和釘。
 4. 青銅の籠り金具破片。
 5. 器種不明の鉄片。
 6. 鉄の曲物。
- その他、和釘、器種不明の鉄製品等検出された。



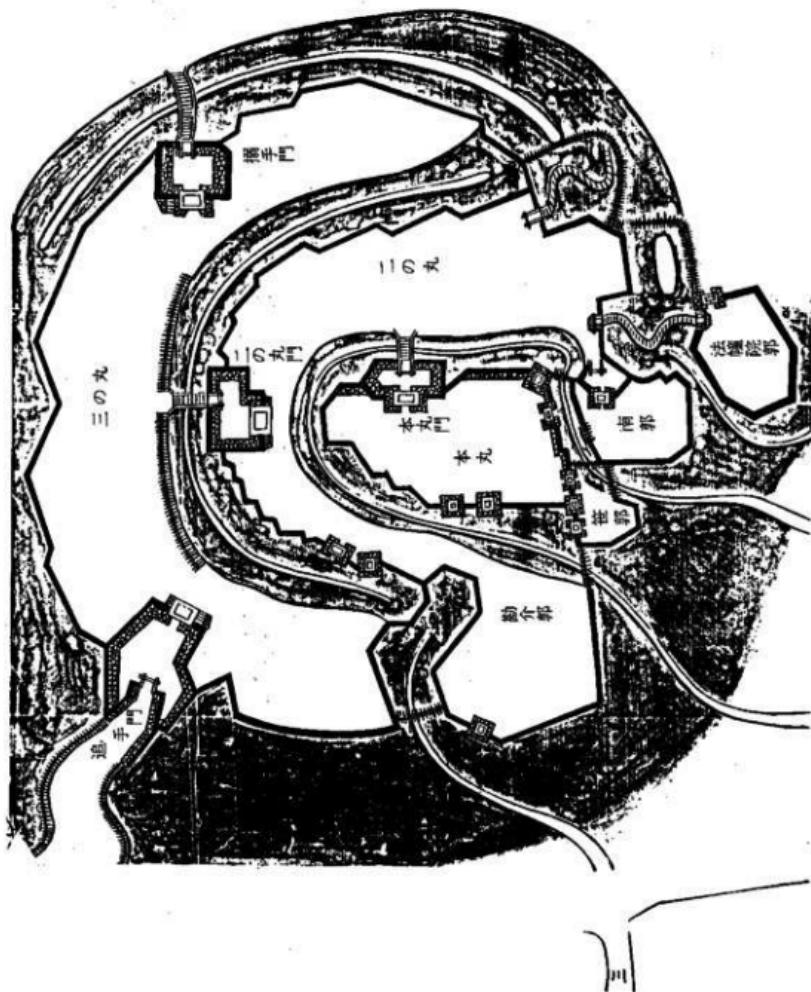
插図5 1.列石出土鐵絲片 2.列石出土鐵絲片 3.和釘
4.銅製片 5.鐵片 6.鐵曲物

高遠城の図 時代不祥



挿図 6 高遠城の図 時代不祥 (内閣文庫蔵)

高遠城縄張図



擇図7 高遠城縄張図

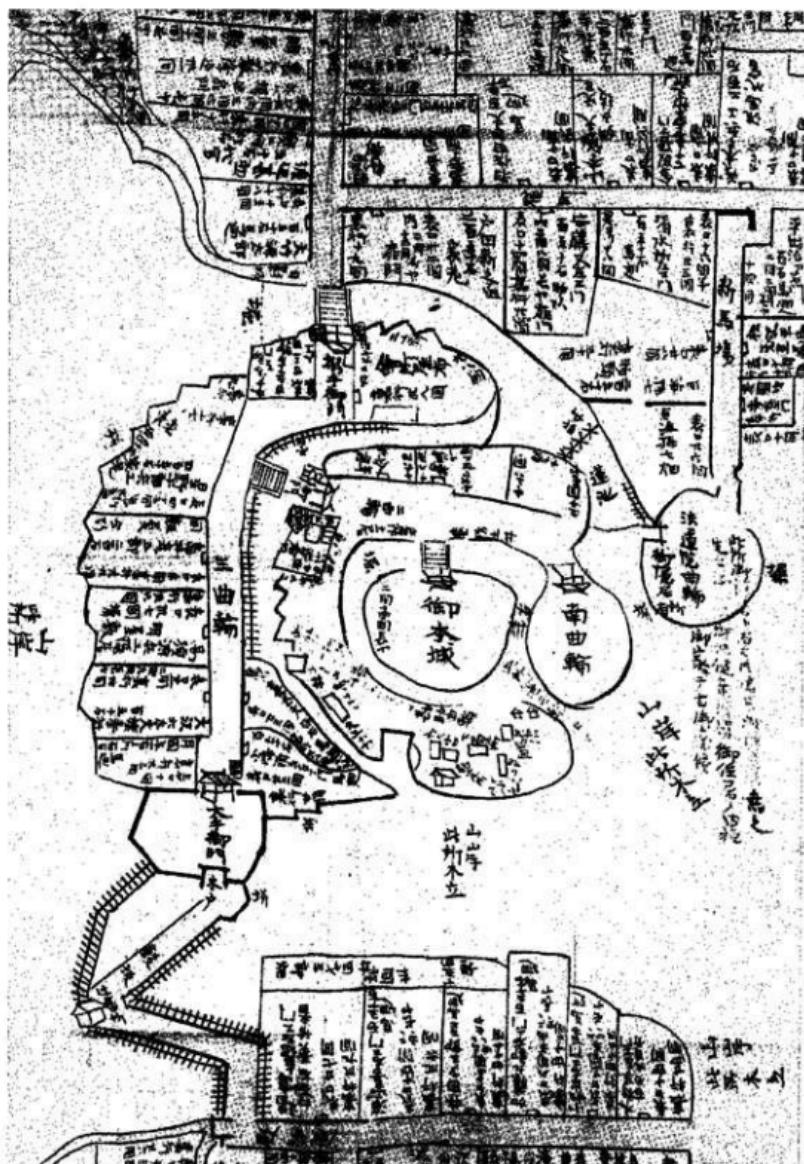
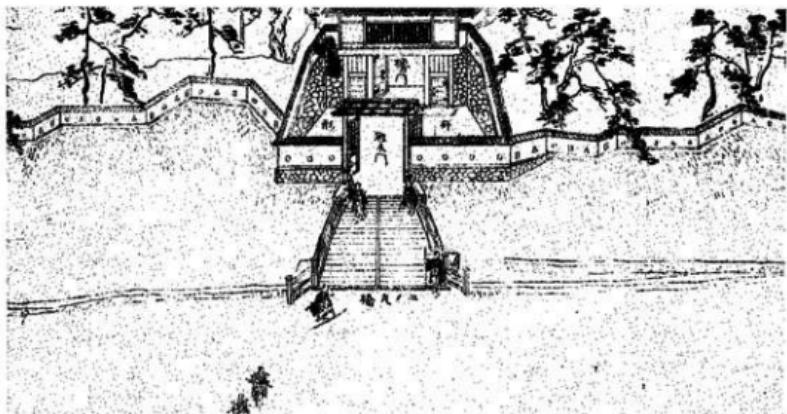
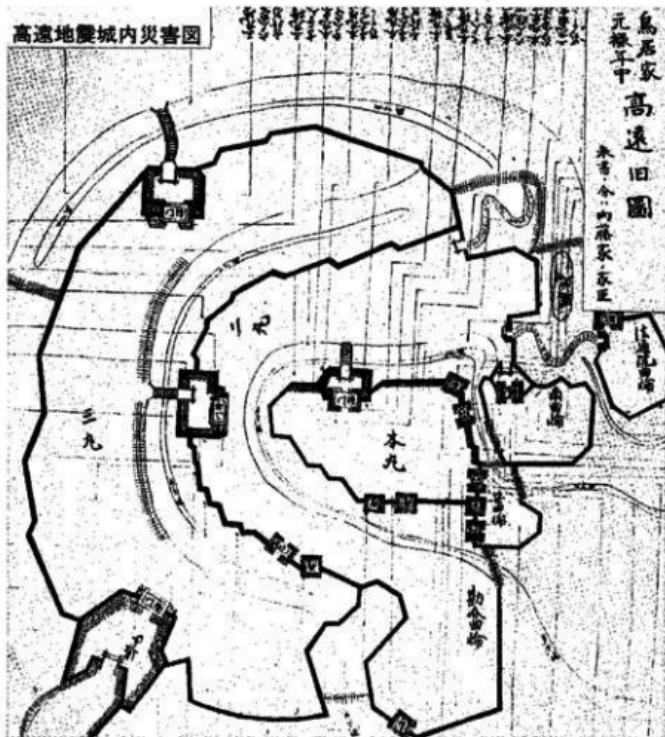


図8 高遠城之図（江戸時代）



高速地盤城内災害図



摺図9 上 二ノ丸御門(宝曆頃) 下 鳥居家高遠旧図

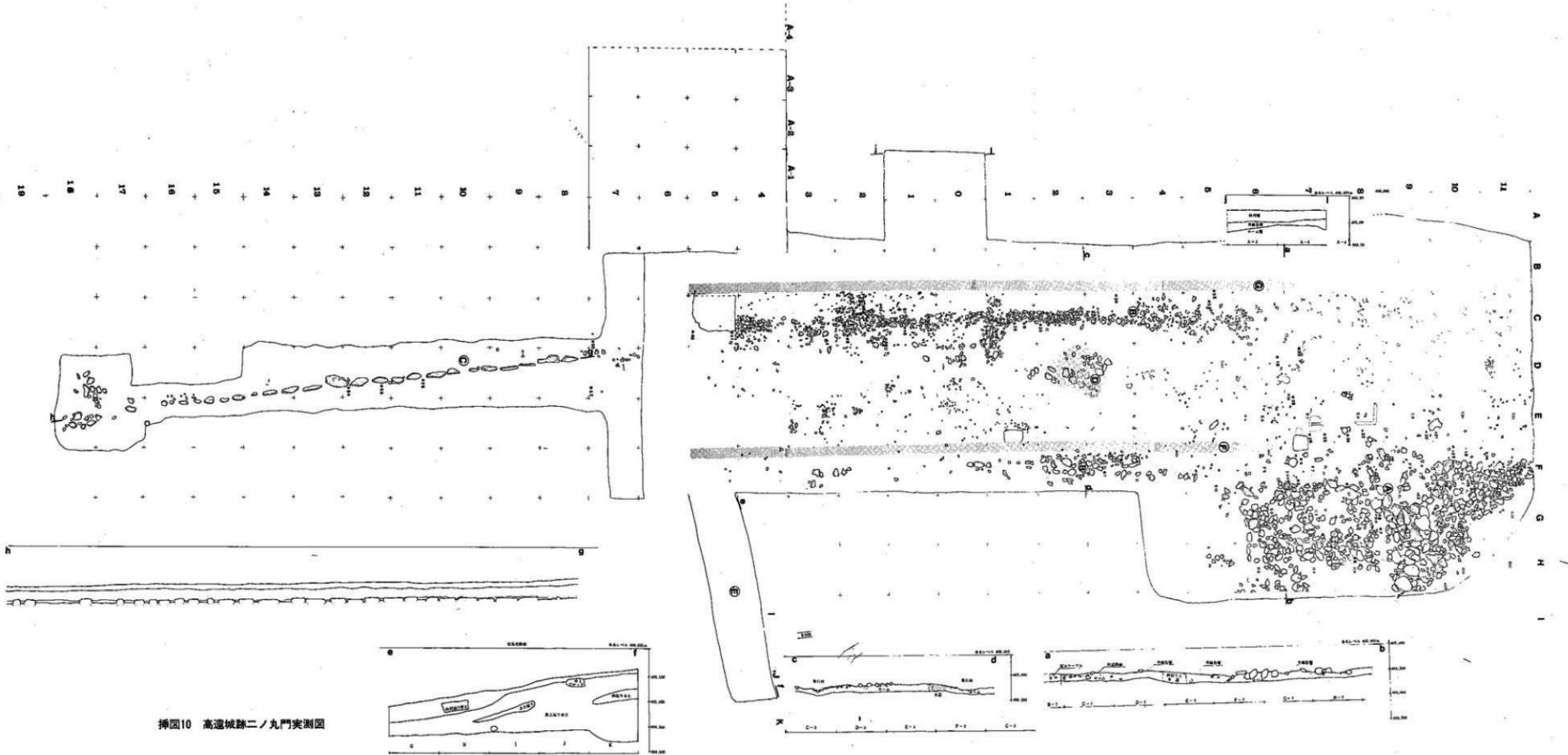
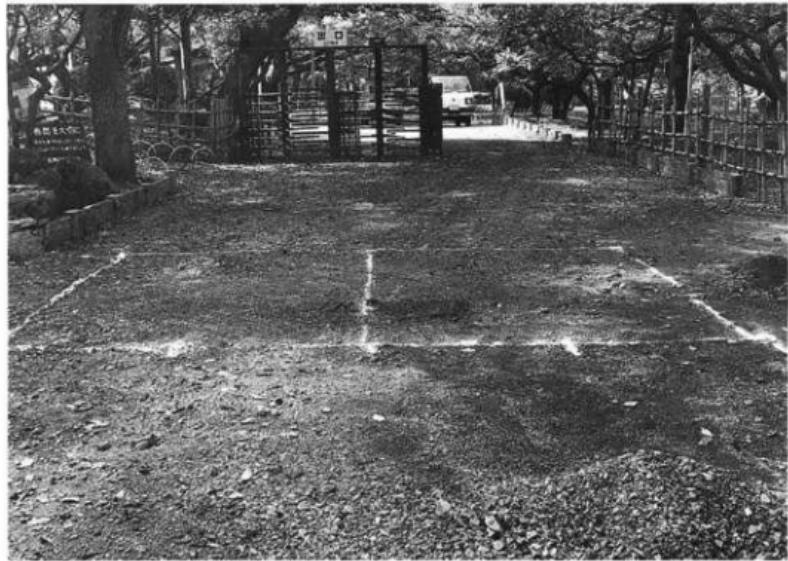
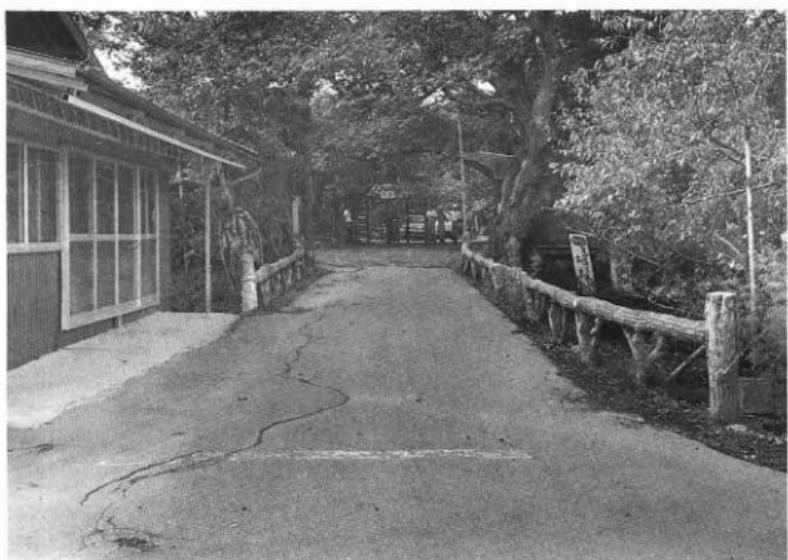


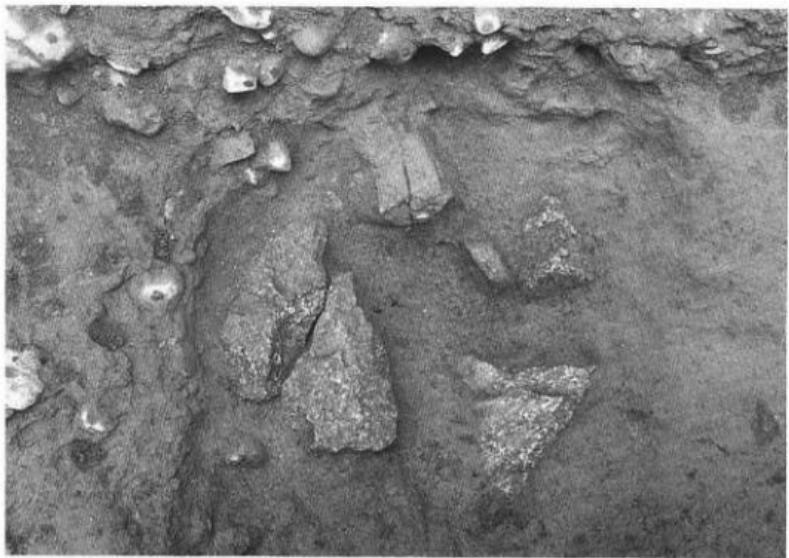
図 版



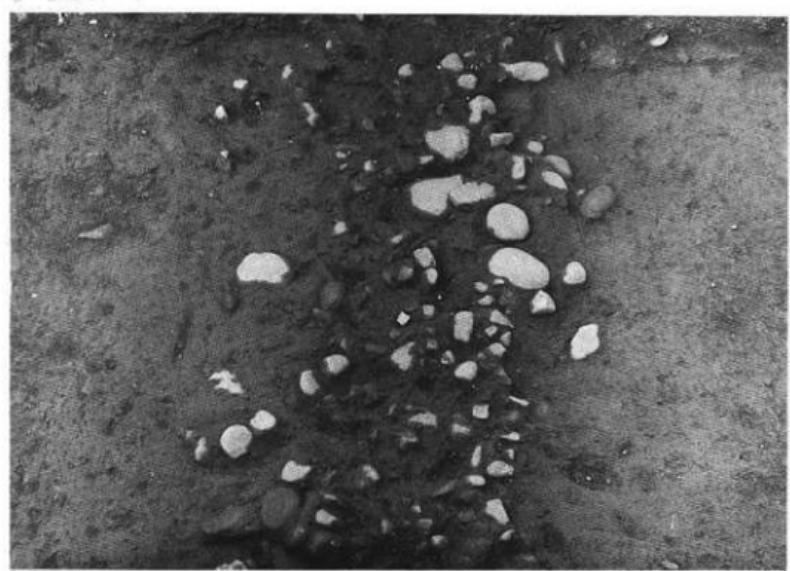
図版1 上：二の丸門入口付近 下：調査前の二の丸門跡



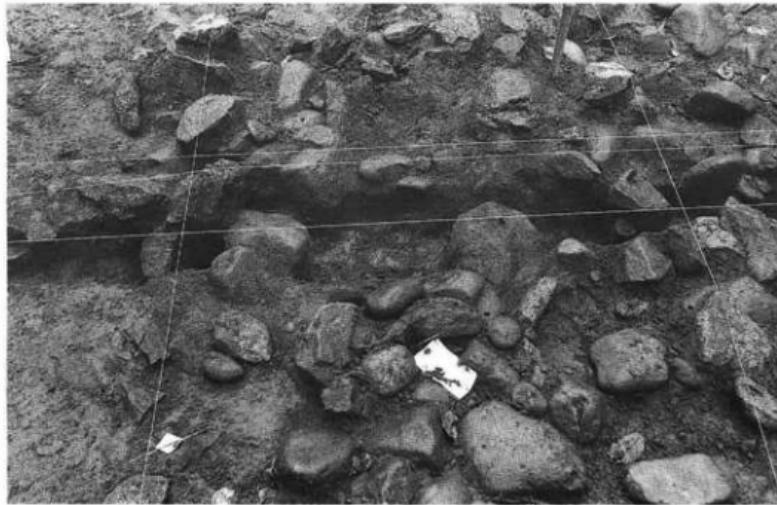
図版2 上：埋土を除去したところ 下：敷石遺構や筋状敷石出土状況



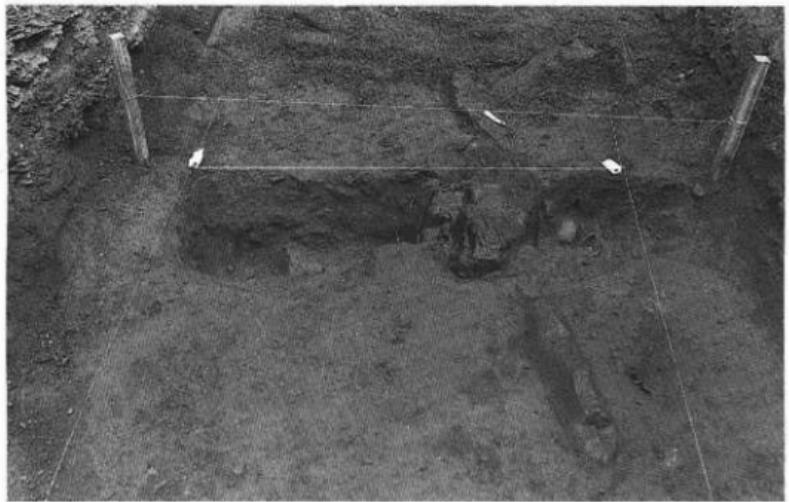
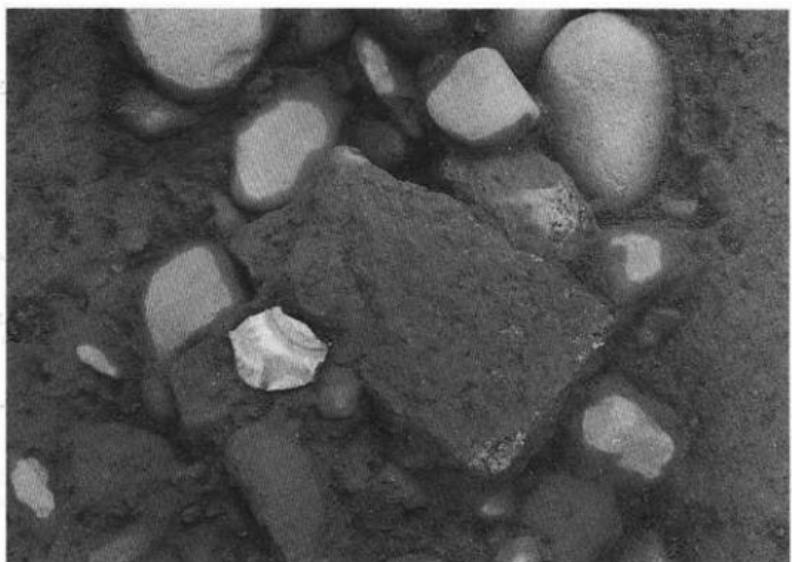
図版3 上：最初割栗石出土の遺構 下：礎石跡と思われる割栗石出土状況



図版4 上：筋状敷石造構 下：筋状敷石造構



図版5 上：敷石遺構 下：敷石遺構の断面調査状況



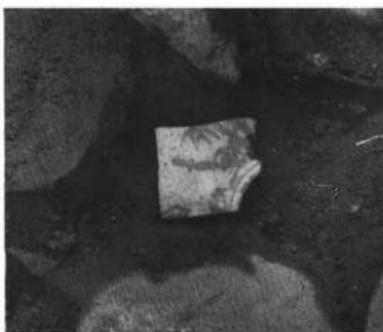
図版6 上：礎石の跡と思われる個所の割栗石や遺物出土状況
下：筋状敷石造構下部の断面調査状態



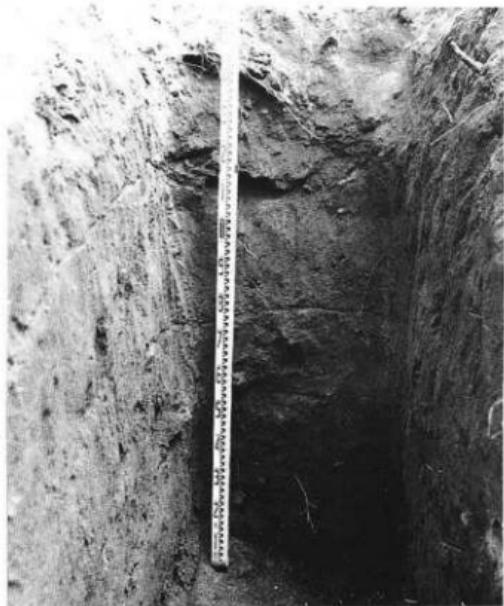
図版 7 筋状造構とトレンチ



图版 8 列石出土状况



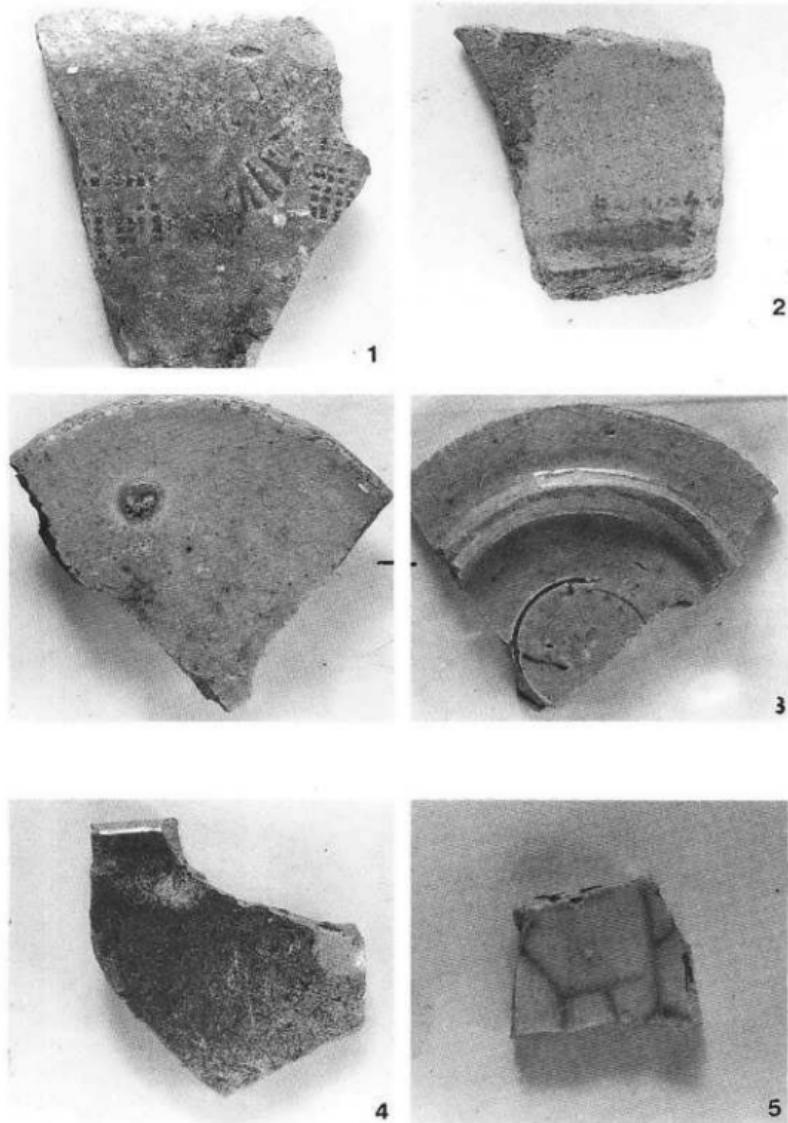
图版9 遗物出土状况



図版10 東側拡張トレンチ



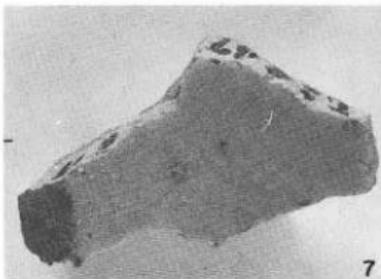
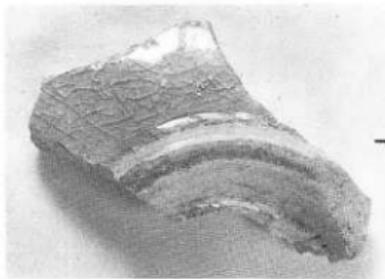
図版11 発掘調査状況



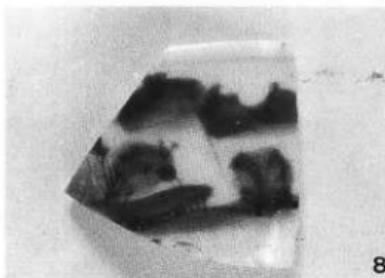
図版12 1.常滑の壺 2.内耳鍋 3.皿の底部 4.地物片口 5.皿の破片



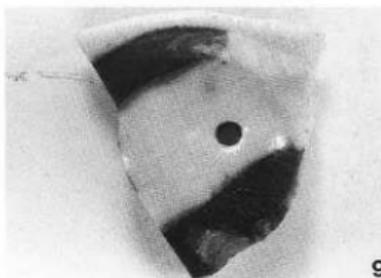
6



7



8



9

図版13 6.染付の碗(巻物絵) 7.御深井軸の碗 8.染付茶碗 9.美濃辰砂軸蓋

あとがき

高遠城跡保存管理計画の一つとして、二の丸門復原計画があり、昭和62年9月中旬より長野県文化課、友野良一先生、木下平八郎先生の御指導のもと、宮下美咲男氏役場の方をはじめ多くの方々の御協力を得、発掘調査を行い10月末日をもって作業を終了をみました。ご協力を得ました方々に感謝申し上げると共に、この二の丸門復原が、早期に実現出来ますよう、一層の御指導をお願い申し上げ、あとがきといたします。

昭和63年3月

高遠町教育次長 北山芳美

高遠城跡二ノ丸門発掘調査報告書

昭和62年8月10日 発行

発行／高遠町教育委員会

印刷／株式会社 オノウエ印刷
